

## 日本万国博覧会の磯崎新：反博運動との関連から

鯉沼 晴悠 (京都工芸繊維大学)

---

本発表は、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会を巡る推進派と反対派との政治的力学の内部において、建築家磯崎新 [1931-] の実践を再検証することを目的とする。

磯崎の日本万国博覧会は、1966年2月に会場基本計画原案作成委員会チーフ・プランナー丹下健三のもと、コア・スタッフとして招集されたことに始まる。その後、磯崎は環境芸術を志向する美術家らとともに「日本万国博覧会イベント調査委員会」を組織し、《お祭り広場》内部の《お祭り広場・諸装置》の設計者として万博の仕事に従事する。

これまでの戦後日本美術史や戦後日本建築史において、磯崎が試みた「インヴィジブル・モニュメント」としての《お祭り広場》は、日本万国博の主力となった環境芸術との連続線において論じられる傾向が強かった。そのような文脈においては、テクノロジーによる非構築性や非実体性、あるいはメディア・イベントとしての先駆性が強調されてきた。しかし、榎木野衣が『戦争と万博』(2005)で指摘したように、政治的な背景を抜きにして日本万国博参加者の実践は十分に語り得ない。なぜなら、万国博開催前夜の1960年代後半は世界規模でエスタブリッシュメントに対する抗議運動が展開された時期でもあったためである。ベトナム反戦運動や三里塚運動の激化に伴い、国家主導の祭典である日本万国博もまた批判の対象とされ、万博反対運動、いわゆる「反博運動」が展開された。

本発表では磯崎の日本万国博での実践を再検討するにあたって、これまで傍流とされてきた「反博運動」の理論的支柱を担った針生一郎と多木浩二の言説分析を経由する。その異化作用によって磯崎が《お祭り広場》に含み込んだ多極的な性格の表出を試みたい。

針生らは、日本万国博への参加それ自体を体制加担と見なすとともに、環境芸術に対してもテクノロジーの持つ合理化の論理が人間性を疎外するとの主張から批判していた。多木が『デザイン批評』季刊第8号(1969)に寄稿した磯崎新論で指摘したように、批判者の論理の中で磯崎は、これまでの芸術実践を特徴付けていた否定性が争点となり、転向問題として日本万国博を巡る賛否の議論の典型例に位置付けられていく。

こうした状況下で設定された《お祭り広場》のコンセプト、「インヴィジブル・モニュメント」は一見、電氣的媒体に満ちた現代都市を考察した「見えない都市」論の具現

化の試みと理解される。しかし、磯崎が万国博閉会後に記した論文からは、そこで強調された不可視性が、体制の側に属する旧来のモニュメントやテクノロジーの性格を超克する手立てとしての意味を持っていたことが窺える。《お祭り広場》は、磯崎の現代都市認識に基づいたものであると同時に、体制の求心力からの逃亡を周到に意識した、万国博内部における磯崎の政治的な振る舞いの現れでもあったのである。